

富山大学公開講座「心とからだの心理学」

第2回：「ゲドの物語にみる心と身体」

富山大学保健管理センター 岸本 寛史

Norifumi Kishimoto: Psyche and Soma in the Tale of Ged

1 はじめに

本稿では物語に即して心と身体という問題について考えてみたい。物語に即すとはいえ、以下は筆者自身の臨床体験を基礎においた論考であることをまず述べておきたい。

本稿で取り上げる物語はアーシュラ・ル=グウィン作『ゲド戦記』（岩波書店）シリーズの第1巻『影との戦い』である。原作は5巻本、外伝も含めると6巻ある。第1巻『影との戦い』が出たのは1968年、第2巻『こわれた腕環』が1970年、第3巻『さいはての島へ』が1972年ではほぼ2年おきに3巻が続けて出て一応完結していた。ところが、18年後の1990年になって第4巻『帰還』が出た。この第4巻には『最後の書』という副題もついていたが、さらに11年の間をおいて2001年になって第5巻『アースシーの風』が刊行された。最初から数えると、実に33年の年月が経っている。作者はアーシュラ・ル=グウィンという女性で、1929年生まれなので、第1巻が39歳のときの作品、第5巻は72歳の時の作品ということになる。彼女はカリフォルニア州パークレーの生まれで、父親はアルフレッド・クロバーという著名な文化人類学者、母親はシオドーラ・クロバーという著名な作家で、『イシー北米最後の野生インディアン』という有名な作品がある。そういう両親の血を受けて、

『ゲド戦記』には、文化人類学の知見がふんだんに取り入れられているのが感じられる。

もともと、文化人類学という学問は、異文化を自国の文化から、特に最初は西洋文化の視点からみて分析する学問だったが、最初は西洋文化を頂点において未開社会から西洋社会への発展という図式の中で見てきたところがある。ところが途中からそれに対する反省が起こり、異文化をそれぞれの文化の独自の視点の中から見ようとするようになった。このような視点の転換は『ゲド戦記』の構成にも影響を与えているように思われる。たとえば第1巻はゲドの視点から書かれているが、第2巻の特に前半はテナーの視点から書かれていて、仮に第2巻から読み進めると、テナーが主人公かと思われるほどである。

2 タイトルについて

まず、『ゲド戦記』というタイトルについて考えておきたい。ゲドは一応この物語の主人公といえる人物だが、2巻では前半はほとんど出てこないし、4巻、5巻になると背景に退いて出番もかなり少なくなるので、通常の主人公のイメージとはずいぶん違い。さらに、戦記という名前からはゲドの戦争の記録というイメージがわいてくると思うが、これは狭い意味での戦記ものではない。広

い意味ではゲドの物語は戦いの物語といえないこともないが、戦う相手が普通の意味での戦争とは違って、自分の影であったり、よく分からなかったり、特に4巻以降では、先ほども述べましたように、ゲド自身が出てくるのが少なくなり、狭い意味での「戦い」はテーマではなくなってくるので、『戦記』という名前にとらわれすぎないほうがよい。

また、第1巻の日本語のタイトルは『影との戦い』となっているが、原題は A Wizard of Erathsea である。直訳すると『アースシーの魔法使い』となるが、魔法使いと訳した wizard という言葉は、賢者という意味もある。もともと、wizard という言葉は wise（賢い）+art（過度に、大いに）という言葉に由来する言葉なので、魔術を使いこなす魔法使いというよりは、大いなる知恵を持った大賢者というイメージで捉えるのが適切ではないかと思う。そして、後で触れるように、第一巻ではゲドが未熟な魔法使いから成熟していく過程を描いた物語であって、まだ大賢者にはなっていない。だから、第1巻における「アースシーの魔法使い」とはゲドという一人の魔法使いを指すよりも、むしろ「魔法使い」とはどのようなものか、賢者とはどのようなものかを述べていると捉えるのがよいと思う。

もうひとつの「アースシー」という言葉についても考えておきたい。「アースシー」という言葉は大地を表す earth と海を表す sea から作られた造語で、ル＝グウィンが作った言葉である。弘法大師の空海は空と海だが、アースシーは陸と海なので、陸海と訳してもいいかもしれない。これを単に物語の舞台になる地方の名前ということで済ませるだけでは著者の意を十分汲むことにはならない。第4巻と第5巻を読んでいると、そこにはもう少し深い意味が込められているのを感じるからである。

アースシーというのはこの物語の舞台となる地方のことで、本の中にはその地図もちゃんと載っているが、この地図を見ると、大陸ではなく、多くの島からなる多島海（アーキペラゴ）がその舞

台となっている。つまり、地と水とは十分に分化しておらず、陸と海を明確に分けることができない、あるいは陸と海とが分化する辺りのことを物語っているということが示唆される。この推測は、第4巻と第5巻でそれぞれ火と風が一つのテーマとなっていることを考えると、あながち検討はずれではないと思われる。第4巻では火がテーマになっている。また、第5巻のほうは風がテーマになっている。第5巻の原題が The Other Wind 『もうひとつの風』（邦訳は『アースシーの風』となっているが）となっていることからそれが伺われる。

こうしてみると、1巻から3巻までは地水、4巻で火、5巻で風がテーマとなっていて、全体で地水火風という四元素がすべて扱われることになっていて、実によくできていると思われるし、18年後に第4巻を、さらにその11年後に5巻をル＝グウィンが書かねばならなかったのも分かる気がする。

3 真の名

物語の粗筋を述べてしまうのは、物語を楽しむを奪うだけでなく、物語の真の価値を損なうことにもなりかねないが、ある程度は粗筋も知っていると以下の論考を理解しにくいと思われるので、論考の流れの中で最小限必要な部分を紹介しながら議論を進めたい。

まず、舞台となるアースシーの世界には、先の述べたように大陸はほとんどなく（北にホーゲン大陸という文字が見えるだけです）、アーキペラゴ（多島海）と呼ばれる、ハブナーを中心とする島々と、カルガド帝国の主に二つの地域からなっている。アーキペラゴの北部にある島のひとつ、ゴント島にダニーという名の少年がいた。母親は彼が1歳のときに亡くなっている。父親は鍛冶屋だった。6人の兄がいたが、みな、とうに家を出ていた。小さいころはおば（母の姉）が面倒を見てくれたが、身の回りのことができるようになると、誰にもかまってもらわなくなり「雑草のように大きく」なった。ところが、このおばは、魔法使いでもあったのだが、ふとした拍子にダニーが

人並みはずれた力を持つことを知ってから、魔法の手ほどきをするようになる。ただ、彼女は真の魔法使いではなく、本物と偽者の区別ができず、呪いの言葉だけはたくさん知っていたので、病気も、治すよりめからせるほうが得意だったかもしれない、という有様だった。それでもできるだけまっとうなものだけを教えようと努力し、じきにダニーは鳥や獣を思いのままに操る術を身につけ、すぐにおばから習うものは何もなくなくなるほどだった。山腹の牧草地で獰猛な鳥といることが多いダニーを、村の子供たちはハイタカと呼ぶようになった。

そんな時、カルガド帝国の兵士がゴント島に攻め込んでくる。彼らはあっという間に町を占領し、谷にもどんどん侵略してくるのだが、ハイタカは霧あつめの術を使って敵を撃退してしまう。しかし魔法に力を使い果たしたダニーは、「口が聞けず、食べることも眠ることもしない」という状態になる。そこにゴントの大魔法使いオジオンがやってきて彼の手当てをし、名前を授けたいといって「ゲド」という真の名を授ける。こうして名前を授けられたゲドはオジオンの弟子になる。

ここで、魔法について少し考えてみる。最初に出てくるのは、山羊を集めたり鳥を呼び寄せたりする魔法だが、その秘密は、真の名にある。真の名を唱えれば、タカでもワシでも山羊でも呼び出すことができる。ゲドも真の名である。真の名はみだりに他人に明かすものではない。名を知るものに操られる危険があるからである。だから普通はハイタカという名で通している。逆に言うと、タカとかワシとか山羊というのは、われわれが与えた仮の名前であって本当の名前ではない、ということである。

これをもう少し拡大すると、たとえば癌とかうつ病とか肺炎、といった名前、病名も真の名なのだろうか、という疑問が浮かんでくる。あるいはモルヒネとかそういった薬の名前も同じである。こんな事例が思い出される。ある癌の末期の方で、痛みがあって、モルヒネを使って大分楽になっていたが、モルヒネという名は伏せて単なる痛み止

めとして使っていた。ところが、モルヒネという名前を伏せて使っているのはだましているようで申し訳ないと、「今あなたに使っている薬はモルヒネです」と告げた所、「モルヒネを使うということはもうだめということではないか」と動揺されて、その後は痛みのコントロールが難しくなったというケースを聞いたことがある。この場合、モルヒネという名前も真の名ではなくて仮の名前なのだという視点があれば、無用の苦しみを与えることはなかったかもしれない。癌の方々の診療に携わる中で、癌の方々の示される症状の中には、癌という名前にやられてしまっている部分も結構あるのではないかと感じることも多い。

最近、イギリスからナラティブ・ベイスト・メディスン（NBM）という動きが出てきたことは注目される。病気を物語と捉え、医学的な病名や治療も医療者側の物語として捉えようとしている点が斬新であるが、NBMの姿勢はもっと徹底していて、真の名前などない、それらはすべて物語り、仮の名前だという姿勢を持っているので、この点はゲドの物語とは異なる。

4 均衡

オジオンの弟子になったハイタカ（ゲド）は、早く魔法を覚えたくて仕方ないのだが、オジオンはといえば、雨が降っても雨よけの魔法を使わずにぬれていくし、我慢が大切と説くだけだった。そして、初めて迎えた冬に神聖文字の読み書きを教わる。春のある日、野原で遊んでいたゲドは、ル・アルビの領主の娘と出会い、死んだ人の魂も呼び出せる？と唆されて、『知恵の書』の呪文を唱えてしまう。すると不気味な「影」が姿を現し、恐怖に襲われて身動きが取れなくなる。それを救ってくれたのはオジオンだった。このエピソードがあって、オジオンは、自分のところにとどまるもよし、ロック島に行ってもっと高度な術を身につけるもよし、すべてはそなた次第、といって決断を迫る。ロックには魔法使いの学院があるからである。ゲドはロックへいくことを決める。

ロックではいろいろな魔法を習うが、たとえば

手わざの長に教わった石をダイヤモンドに変える魔法も、魔法が切れると元に戻ってしまう。そこでいつまでもダイヤのままにしておく魔法はないか、と尋ねる。これに対して、「眼くらましの術を使えば・・確かに物が変化したとは思ふ。・・だが術は実際には物を変えはせん。この石ころを本当の宝石にするには、これが本来持っている真の名をかえねばならん」という答えが返ってくるが、「それをかえることは・・たとえこれが宇宙のひとかけにしか過ぎなくとも、宇宙そのものを変えることになる」と戒められる。さらに、「宇宙には均衡というものがある、物の姿をかえたり何かを呼び出したりといった魔法使いの仕業は、その宇宙の均衡を揺るがすことにもなる」と警告する。呼び出しの長も「ロークの雨がオスキルの旱魃をひきおこすことになるかもしれぬ、そして東海域に穏やかな天気をもたらせば西海域に嵐と破壊を呼ぶことにもなりかねないのだ」と戒められる。ここにあるのは「均衡」という考え方である。

以前、こんなケースの相談を受けたことがある。長年胃潰瘍をわずらっていた方が、ヘリコバクターピロリという最近が胃潰瘍の原因だとわかってきて、その除菌療法を受けたところ、胃潰瘍はそれ以来起こさなくなったが、代わりにめまいとか頭痛とか、それまでなかった症状が次々とでるようになったということで、まさに「東海域に穏やかな天気をもたらせば西海域に嵐が起こる」という事態であった。全体のバランスをどうやって保つか、という視点も心と身体の問題を考えると時には必要になってくる。最近、神経内分泌免疫学の分野でも、バランスという考え方が注目されるようになっている（スターンバーグ（2001/2006）『ボディ・マインド・シンフォニー』日本教文社）。医学においてはバランスよりは病原の除去・排除が焦点となりやすいので、均衡に焦点を当てるパラダイムは特に意味を持つ。

5 影を放つ

ゲドが学院に入って最初に学院の中を案内して

くれたのはヒスイという先輩だが、ヒスイは競争心が強くゲドに対抗意識を持っている。カラスノエンドウという友達もできるが、彼は思いやりがあり、ヒスイともゲドとも公平に付き合う性格だった。ヒスイとゲドとは互いに敵愾心を燃やし、結局対決することになるが、そこでゲドは長たちの警告にもかかわらず死霊を呼び出す魔法を使う。これは心理学的にはインフレーションと呼ばれる状態で、技術を身につけ始めたとき、驕り高ぶることになりやすい。ゲドが呪文を唱えるうちに、ゲドは何か黒いものを抱き、黒い塊が崩れ始めると散り散りになり、すっかり消えてしまう。その影は地面から湧くようにすっと伸びて人間の形をした死霊が浮かび上がり、すると大地が裂けてその中から強烈な光が差し込み、そこから黒い影の塊が出てきてゲドを襲う。その窮地を救ったのは大賢人ネマールだったが、ネマールはゲドから影を追いつぐために自分の能力のすべてを使い果たして死んでしまう。ゲドも4週間意識不明のままだったが、薬草の長の辛抱強い治療の甲斐もあって、徐々に回復する。ただ身体にも心にも傷を負ったままで、以前とは別人のようになり、心を入れ替えて修行を積み、まじない師の資格を与えられる。

6 竜との駆け引き

この後の話は、ゲドが放った影との取り組みになるのだが、影には形もなく名前もなく、どうしたらいいかわからない。そんな時、ロー・トーニングという島から、ペンダーの竜が卵を返していつ襲ってこないとも限らない状況なので、島を守ってほしいと魔法使いの派遣を頼んできたため、ゲドはそこに赴くことに決めた。ここで興味深いのは、ゲドの真の目的は竜退治ではないということである。

竜退治に出かける前、ゲドは島の子どものアイオスがしょう紅熱で危篤状態に陥っている時に、アイオスを助けようとその後を追って死者の国まで踏み込み、そこで影と出会う。ここではオタクという小動物に助けられる。こうしてゲドは生き

たまま黄泉の国へ行き、そのまま戻ってきた。医の神アスクレピオスですら、死者を蘇らせたためにゼウスの怒りをかってその雷で死んだほどのので、超えてはならない一線というのがあるかもしれない。もっとも、アイオスは助からなかったのでも、何とかゲドは戻ってこられたのかもしれない。ともかく、黄泉の国で影と出会ったことで、ゲドは竜退治にベンダーという島へ出かける決心をする。竜退治というのは西洋の物語に根深くあるテーマで、その場合、竜は悪の元凶であり、それを退治して女性と結ばれるというのがお決まりのパターンである。しかし、ゲド戦記における竜の位置づけはそう単純ではない。まず、先に述べたように竜退治が真の目的ではないということ、そして、竜は9匹いるのだが、5匹まで殺したところで竜の親玉のようなやつが出てきて、対話をするのである。といっても竜が話すのは太古の言葉で、うそと真が入り乱れ、注意を集中していないと騙されてしまう。さらに、竜はお前を狙っているものの真の名を教えてやると誘惑するが、ゲドはひるまず、竜の名を明かして、アーキペラゴには二度と出てこないことを誓わせる。竜を完全に退治するのではなく、不可侵条約を結ぶという形で決着がつく。こういう終わり方は、従来の西洋の物語のパターンとはかなり違う。それは竜を退治することが真の目的ではないということがゲドにはわかっているからである。診療をしながら、この頭痛をとってくれさえすれば問題はすべて解決するので何とかしてほしい、とにかく痛みだけとってほしい、というような言い方をされるのが時々あるが、そういうときに限って痛み止めがぜんぜん効かなくて、薬がどんどん増えたりすることも多い。そういう場合は、竜を退治するだけでは問題は解決しない、問題は別のところにある、ということに気づく必要がある。なお、竜の位置づけは、5巻になるとかなり変わってくる。

7 影という問題

この後も、オスキルのテレノン宮殿で王妃セレットの罠を逃れ、隼になってゴントのオジオンのと

ころで傷を癒すということがあったり、その後でカルガド語を話す兄弟とであったり、カラスノエンドウと再会したり、いろいろあるが、紙数の関係で省略して、最後に一箇所だけ、非常に重要と思われる場面だけに触れておきたい。それまで影から逃げてばかりいたゲドに、オジオンが「向き直るのじゃ、もしもこのまま、先へ先へと逃げて行けば、どこへ行っても危険と災いがそなたを待ち受けておるじゃろう。・・・そなたを追ってきたものを、今度はそなたが追跡するのじゃ」と告げる場面である。この場面での私の頭に浮かぶのは、パニック障害とか不安神経症と呼ばれる人たちの治療経過のことである。これらの状態を抜け出すには、薬だけではなかなか難しく、どこかで「向き直る」ことが必要だと感じるからである。

さて、カラスノエンドウがゲドに同行することになり、いよいよ影と対決のときを迎える。戦いながら、ゲドは相手は何者であるかを悟り、同時に真の名を呼ぶところが、この第1巻のクライマックスである。つまり両方の真の名は「ゲド」だった。そうして二人はひとつとなる。最初にゲド戦記における戦いは通常の戦いとは異なると述べたが、第1巻における戦いは、実は自分自身との戦いでもあった、ということである。この影という考え方は、ユング心理学における影の考え方の影響を強く受けている。ユング心理学が他の心理学と異なる点の一つ挙げるとすれば、筆者はこの影という概念を挙げたいと思う。影とは自分がこれまで生きることのなかった側面であり、影と取り組むことが重視される。だから、クライアントもセラピストも、自分の影と取り組むということが大切になってくる。病気を、外から悪者が取り付いたものとみなすなら、その悪者を取り除く竜退治のようなことが治療となるだろうが、その先に、病気が自分の中からも生じているということを見据えるなら、その治療は単なる竜退治では収まらないものになる。そのようなことを自覚する時、ゲドの物語が示唆に富むことに気づくように思われる。